

時代の変化に対応

子どもの数の減少や高校進学率の上昇。そして、科学技術の進歩や価値観の多様化など、子どもを取り巻く環境は著しく変化しています。人々の教育に対する考え方やニーズも当然多様化していると思われれます。今、教育はどのように動いているのでしょうか。今回は高校教育に焦点を当て、今注目を集めている「特色ある学校づくり」をルポ。教育のトレンド(潮流)を追ってみました。

■特色ある学校づくり

近年、教育や学校に対する県民のニーズは多様化しています。このため、高校教育においては、時代の要請に即した「学科の設置や再編成を通して「特色ある学校づくり」が進められています。例えば、地域の伝統文化を学ぶ「美術工芸コース」、日本古来の建築技術を学ぶ「伝統建築コース」、国際人の育成を目指す「国際コース」、阿蘇リゾート基地を支える「国際観光科」など、生徒の特性や地域のニーズをとらえた内容が増えてきました。

今回はその中の二校、ハイテク農業を目指す「県立鹿本農業高校・バイオ工学科」と県下唯一の単位制高校「県立湧心館高校」を訪ねてみました。



地域のバイオ工学の研究拠点として

県立鹿本農業高校バイオ工学科

●県内唯一の学科

ジャガイモの根にトマトが実る「ポマト」が世間を驚かせ、「バイオテクノロジー」という言葉が盛んに聞かれるようになったのが、今から八年前。その一年後の昭和六十二年、県立鹿本農業高等学校に「バイオ工学科」が新設されました。当時、全国で農業高校に「バイオ工学」を本格的に取り入れたのは岩手県や鹿児島などごくわずか。生徒たちは、植物分野と微生物分野を中心に、最先端のバイオテクノロジーの基礎技術を学習します。

●地域の農業とかがわる

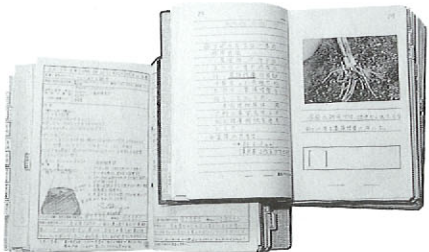
白衣に白帽子を付けた生徒がフラスコの中の小さな芽をピンセットでより分けていきます。これはフアレノプラシスの一種。無菌培養の実習風景です。本校で



は、フアレノプラシスのように増殖の難しい花の種を栽培農家から預かり無菌播種し、その苗を再び農家に送るといった生産の手助けを行っています。その他にも、今、県北一帯で生産を伸ばしつつあるカーネーションやイチゴ、ハーブの茎頂培養なども本校で行われています。

県北はもとも米の他にスイカやメロンなど施設園芸の盛んなところ。しかし、就農者の高齢化などから、より集約的な農業が求められるようになってきました。そのような地域にあって、充実した施設と技術スタッフを持つ本校は、「研究の核」としても重要な位置を占めています。農業という産業に貢献してこそ、地域に貢献してこそ、農業

高校の存在価値がある」という境谷大校長の考えに負うところも大きいようです。



●高校生で卒業

校内の廊下にあるテーブルの上には黒表紙の手作り冊子がずらり。本の厚さはゆうに十五センチほど。ペー지를開くと実験ノートや写真グラフなどなど。これらは今年度卒業した生徒たちの卒業論文です。生徒たちは「プロジェクト学習」の中で、自分でテーマを決め計画を立て、約一年かけて実験し、記録を「卒業論文」としてまとめます。「理系の大学生が、僕たちの論文より丁寧にできている」と感心してました」と境校長。

研究と言えば、もう一つ。全国の農業高校生たちで作られている「農業クラブ」のプロジェクト発表大会で、本校は昨年、県大会で最優秀賞を、九州大会で優秀賞を取りました。タイトルは「地球環境を考える〜髪の毛のリンスを考える〜」。朝シャンとは、いかにも高校生らしい目のつけどころです。

●農業という産業を選ぶ

生徒たちは卒業後、筑波大学を始めとした大学やバイオ関係の専門学校へ進学したり、醸造、乳酸飲料メーカーへ就職するなど順調な進路状況を示しています。「専門学校へ進み、将来はバイオ技術を家業にも役立てたい」と言う平山賢志君(二年生)はスイカ、ミカン、米を作っている農家の長男です。「種苗メーカーなどに入り、今までにない色の花を作ってみたい」と池田瞳さん(二年生)。若い人の農業への新しいかわり方が見えてきたようです。

